

「報恩講におもう」

11月に入ると、お寺では報恩講（ほうおんこう）が勤まります。報恩講は、その名のとおり、親鸞様のご恩に報い、お徳に感謝する法会（ほうえ）であります。

親鸞様は、五濁悪世（ごじょくあくせ）のこの世を生きなければならず、「ますます盛んな煩惱をどうしても抑えることの出来ないこんな私でも救われていく道がある」という確信を持たれました。そして、その称名念仏の道を生涯をかけて歩まれ、その確かさを身をもって証し、「我に続け」と示されたのです。

親鸞様が私たちに、安心と喜びの確かな生き方を示し、導かれたことに感謝する法会であります。

真宗門徒は、報恩講に出向き、みんなで正信偈（しょうしんげ）を唱和し、法話を聞き、お齋（とき）をいただく中で感謝の意を表し、安心と喜びの生き方を噛み締めたいものです。

さて、お寺の報恩講は、ご門徒みんなで執行されます。したがって、準備も大勢のご門徒で行われます。私がお預かりしているお寺を例にしますと、準備初日は仏具のお磨きです。仏様や親鸞様をピカピカの仏具でお飾りしたいと力を込めて磨かれています。次の日はお華束（けそく）つきです。米の粉を蒸して、臼でつき、薄く伸ばして円形にくり抜きます。最終日は、お花立て、お華束盛り、お齋の煮付けや下ごしらえが同時進行してとても賑やかです。当日のお取り持ちは朝早くから、受付、お齋の配膳準備、ご飯炊きや味噌汁作りに大忙しです。年に一度、報恩講の準備の場に身を置かれて、報恩感謝の気持ちに浸り、自分の生き方を振り返っておられることと思います。機会がありましたら、このような場に身を置いてみてください。